

一所懸命 恩返し Vol.3

『人を幸せにする権利』

大野 博之

今号も「古賀武夫ブックレット 第四号 『一所懸命 恩返し』」(平成七年一月、平成十一年六月)から、古賀先生の一九九六年(平成八年)の前半の言葉を辿ります。
この年の後半は映画「人間の翼」の上映が全国に広がり、様々な反響は良くも悪くも出てくるようになり、その度に映画の意味を考え、思索を深めていきました。発言もそれに従ったものが増え、キーワードとして「家族」が頻出するようになりました。

明るい家族が地球を作る

『過去を引き継ぎ、現在を担い、未来を預かっている私たちは、太陽を土を水を、親を先祖を敬い、感謝の心を持って、まずは家族から、そして、世界中親戚でない人はいないのですから、全ての人々への利他の心をもって行動し、本物の地球市民に育っていきましょう』

後期印象派の巨匠ポール・ゴーギャンの作品に『我々はどこへ行くのか』があります。か、我々はどこへ行くのか』があり、ゴーギャンが抱いていた人生観や死生観、独自の世界観などが顕著に示されている彼の最高傑作と呼ばれる作品です。実は、この作品のタイトルについて、古賀先生はいつもこのことを感じながら生活しなければならぬとおっしゃっていました。「それは、周りのすべてのものから感じる事ができる。欲を離れ、与えることを考え、人のことを自分のこと以上に考え、今日も生かされている有り難さを知れば、いつでも頭で理解できるのではなく、肚で感じる事ができるようになる」と解説されました。「本物の地球市民」とは「過去を引き継ぎ、現在を担い、未来を預かっている」責任を果たしていくことで、その基本が家族なのだとおっしゃっているようです。

いい家族になりましょう

『平和』というのは戦争がないというだけではなく、「お互いに睦み合う」状態であることを言います。睦みあい、感謝し合う基礎は、やはり、過去、現在、未来を通じた夫婦、親子、兄弟、家族です。仕事も、社会活動も、結局は家族が基盤であり、家族のために行っているのではないのでしょうか』
前号で、古賀先生が特攻で亡くなったア

口野球選手で戦前最後のノーヒットノーランピッチャー・石丸進一の生涯を描いた映画「人間の翼」にのめり込んでいった理由を考えました。映画初演が終わって六ヶ月、古賀先生が映画制作から上映の活動の期間を経た時期での発言のなかに、古賀先生が「家族」を強く語るようになりました。その背景は、映画の主人公、石丸進一だけが特攻で死んだわけではなく、六九五二名の方が特攻で亡くなり、またそれ以外にも数多くの戦争で亡くなった方々がいて、その全ての人への鎮魂の代名詞として石丸進一の物語を語っているという思いにありました。古賀先生は、多くの特攻で亡くなった方を調べられていました。その中で死にゆく若者とその家族とのふれあいに大きく感動し、涙し、そして家族の尊さをより深く理解し、ここに平和の原点を見つけたのでした。

特攻で出征することが決まった息子と母が送った和歌の遣り取りです。

(母) 現し世の短き縁の母と子が 今宵一夜を語り明かしぬ

(子) いざさらば、我が御国の山桜 母の身に帰り咲かなむ

(母) 散る花の潔さを愛でつつも 母の心は悲しかりけり

我が子を失う母の悲しみの深さを語る情愛の交流に古賀先生は涙しました。

そして、石丸進一が所属した第五筑波隊の隊長・西田中尉(享年二十二歳)のお母さんのお話です。西田中尉のお母さんが基地に慰問に訪れたのは西田中尉の出征の二日後でした。対応した方はそのことをお母さんに話すことができなかったため、息子さんは前線に転勤したと嘘を言い、基地内に案内しました。基地内の休息所に行く間に香華が飾られており、そこには「西田高光中尉の霊」と祀られていました。それを見た対応者が慌てたそのとき、同行していた兄嫁がそつとささやきました。「義母は字が読めません。そして、休息所まで案内し、なんとか場を取り繕ったつもりだった対応者に、西田中尉の母が深々と頭を下げ「ありがとうございました。息子がお役にたつたと分かかって、安心して帰ります」とお礼を述べました。文字は読めなくても、母の勘で全てを悟ったのだそうです。この対応者が従軍記者だった後の大作家・山岡荘八その人でした。

母を悲しませることが戦争そのものであるのならば、平和とは母が悲しまないことなのではないかと思いました。自殺で、交通事故で、犯罪で、子どもを失う母は現在もたくさんいます。そして、その母の悲しみを思うと、古賀先生が本物の平和にこだわったのは、今の平和が本物の平和ではないということ伝えるためだったのでしょうか。

人間の翼の意味

『現在と未来を担う我々一人一人が、光り輝いていきいきと生きること、絶対平和と真の繁栄の実現を誓うものである』
この頃の古賀先生の講演のタイトルは「光り輝いて生きる」あなたは今、本当に生きていますか。「生き通す特権と責任」というものでした。内容は、タイの子どもの話から人間の翼の話に渡るもので感動のない人生に意味はないというメッセージでした。そのころの世相として「いじめ」による自殺が問題になっていたこともあり、特攻で亡くなった石丸の無念「アメリカさんとは鉛の玉でなくて、野球のボールで戦いたかった」という言葉を引き出し、「人間は生きるために生まれてきた、死ぬためではない。だから、あなたは生き続けなければならぬ。人の命を奪ってはいけない。」というメッセージも込められるようになっていました。この思いは後年「いのちのまつり」の絵本出版につながっていったのだと思います。

※一九八六年二月に中学二年生の男子生徒のいじめによる自殺事件(中野富士見中学いじめ自殺事件)が起こりました。俗に「葬式」この事件」とも言われ、学級担任がいじめに加担するなど日本で初めていじめ自殺事件として社会的に注目された事件です。このあと、全国で十代によるいじめを原因とする自殺が後を追いつつ、当時の文部大臣が緊急アピールをしました。あれから十七年経った今でも、いじめによる自殺問題が続いていることにこの問題の深さと、社会全体で取り組むことの重要さを考えさせられます。

(以下続く)